

棲み分け社会と利潤形成：「関係」概念としての価値・利潤

徳永，正二郎

<https://doi.org/10.15017/4491680>

出版情報：経済学研究. 53 (6), pp.31-42, 1988-03-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



棲み分け社会と利潤形成*

——「関係」概念としての価値・利潤——

徳 永 正 二 郎

プロローグ——『ヴェニスの人』の対話

シャイロック： いま僕は君に10ダカット支払
いましょう。君の体の力という力はもうす
べて僕のものだ。さあ、働きたまえ。

アントニオ： おお、君はなんという知恵者だ。
それにひきかえ僕はなんという不幸せ者だ
ろう。君は僕が精根込めて作った衣服に10
ダカットの費用を加える、そしてそれを24
ダカットで売って4ダカットの利潤を手に
することができるのだ。僕に布を買い道具
を買う金があってそのうえ10ダカットの蓄
えがあれば、僕も君と同じことができるの
になあ。だがまてよ。もし僕が君の衣服を
24ダカットでなく20ダカットでしか買わな
いといったらどうなる。

岩井克人氏はアントニオの懐疑につきのよう
な快刀をふるう。

シャイロックとアントニオは、産業資本
主義経済のなかでは、二つの異なった「価
値体系」に棲む異種経済人である。シャイ
ロックは、生産手段を所有している産業資
本家にだけ開かれた価値体系、すなわち「生
産過程における、労働力、原材料および生

産手段とそれらの結合によって生産される
必需品および生産手段との間の変換比率」
に棲む住人である。アントニオは自らの労
働力のほかに売るべき商品を持たず、した
がって生産手段から切り離されている労働
者である。つまり、「市場における労働力と
必需品との交換比率」という価値体系に生
活している。

生産手段を所有しているがゆえに、二つ
の価値体系に同時に接触できる産業資本家
シャイロックは、それらの間に存在する差
異を利潤という形で搾取することができる。
ここに剰余価値が発生するのである。

産業資本による剰余価値創出の仕組みは、
結局、ノアの洪水以前の資本の形態である
商業資本の利潤創出の仕組みと論理的に同
型なのである。すなわち、産業資本家は、
資本主義経済の「内部」に一つの「遠隔地」
を見い出したにすぎない。

賃労働者アントニオは産業資本家シャイロ
ックとその経済世界を棲み分けている。アント
ニオは、観念の上でも24ダカットで売られる衣服
が20ダカットの費用で仕上がったと知っても対
抗する術をもたない。彼には労働力商品を衣服
と交換できるだけである。生産諸要素それぞれ
と衣服との価値関係はシャイロックの聖域とな

* 本稿は前稿「技術革新と『投下労働価値説』」（『経済学
研究』第53巻4・5号）の続編である。

る。アントニオはおのが身の不幸せをあらためてかみしめる。

だが、一度は見捨てられたアントニオも、岩井氏のつぎの歴史予言に気をとりなおす。

しかしながら、古代あるいは中世における言葉の真の意味での遠隔地交易が自らの運動によって自らの存立基盤を切り崩していく仕組み宿していたのと同様に、資本主義経済における産業資本家の内なる遠隔地との交易（二つの異なった「価値体系」との交易）も、自らの運動によって剰余価値発生基盤そのものを切り崩していく仕組みを内に秘めている。シュムペーターが、ワルラスの「無利潤論」を援用して示そうとしたのはまさしくこの点なのである。商業資本による剰余価値発生仕組みを永続的でないと棄却したマルクスの論理が、産業資本による剰余価値発生仕組みに関するマルクス自身の理論に差し向けられたことになる。

（岩井克人『ヴェニス商人の資本論』92～93ページ）

資本主義はその内部に革新の力、競争の力を不断にひきだす動的経済である。そのなかで淘汰の危険にさらされている企業は、たえず技術革新への競争に駆りたてられる。技術革新の勝者のみに新しい利潤が創出され、劣者は損失の危険にさらされる。逸早く技術革新に成功した企業は「市場という空間の内部に隠されている遠隔地」とは異なる「未来という遠隔地」で成立している価値体系と直接接触して利潤を創出する。「閉じられた空間から開かれた時間への転換」のなかで競り合いながら、企業はたえず技術を革新し、利潤を生みだしていく。（同上97～98ページ）

I 『ヴェニス商人』は何を見落とししか

1. 生産諸要素の私的所有と棲み分け社会

産業資本主義社会は経済的棲み分けの世界であり、二つの異なる「価値体系」が存在している。岩井克人氏はそういつている。

だが、棲み分けられる市場は、(1) 労働者、資本家ともども開かれている労働力と必需品との価値体系と(2) 資本家のみに開かれている生産過程における生産諸条件（労働力、原材料および生産手段）とそれらの結合によって生産される必需品および生産手段とのあいだの転換比率という価値体系であろうか。

産業資本主義といわず現代の資本主義においても、資本主義は棲み分けられた経済社会である。その棲み分けの基盤は、ワルラス流の価値体系などでなく、土地、労働、生産手段、貸付可能な貨幣（自身には価値をうみ他人には使用価値をもつ貨幣）という生産諸要素の私的専有にある。

私的に専有された生産諸要素が企業家である生産資本の手のなかに結合されるとき、かれらは別々の市場で企業家と交渉し、社会の富である総生産物の分配請求権である貨幣を要求する。

労働者はいまみんながどの程度の教育、文化、娯楽、衣食住の水準で生活しようとしているかが適正な労賃（労働力商品の価値）をもらっているかどうかの価値基準である。

利子を生むために貨幣を提供する貸付資本は、その貨幣が世間並の歩合でふえるかどうか貸付の基準となる。

土地所有者の土地がどの程度の価値すなわち

地代を生むかは、最劣等地のからの経済的距離を基準としている。

企業家である生産資本の価値すなわち利潤は、労賃(経営者としての賃金もふくむ)、地代、公租公課、生産手段の再生産費用および資本金・借入金にたいする配当・利子という諸費用が商品の売上収益のうちにしめる割合が基準となる。

労賃、利潤、利子(配当)、地代、さらには生産手段の価格は、別々の市場で異なる価値の基準で決定される。経済社会は生産諸要素の専有者ごとに棲み分けられており、その価値基準にもとづいて社会の富の分配請求権である貨幣を配分する。

貨幣を分配しあうために独自の価値基準をもつそれぞれの棲み分け市場は、手にいれた貨幣をつうじて社会の富を分けあう。棲み分け社会は貨幣を媒介に社会の富を取り込む社会になる。

貨幣がなければなにびとも商品市場には近づけない。「労働力と必需品の交換比率」という価値体系なるものは、観念の産物であって実在しない。

労働者は私的に専有している労働力を直接生活手段と対峙させることはできない。銀の食器を無償で手にしたジャンバルジャンの世界ならいざ知らず、労働者は自分の労働力を一度貨幣にかえたあとでないと、生活手段市場に参入できず、そこから締めだされてしまう。資本家も貨幣をもっていなければ労働市場に一步たりとも立ち入ることはできない。

資本主義的棲み分け市場、すなわち企業家の聖域である生産手段市場、企業と諸個人の接点である生活手段市場、企業と労働者が会合する労働力市場、企業と貸付資本が交渉する金融市場などは、貨幣の姿で自らの価値を表現し、独自の価値体系をつくる。労働力市場も生活手段市

場もそれじたいとしては高い壁に遮られている。貨幣だけがその壁を乗り越え、異質な市場をかけめぐることができる。資本主義社会では労働力と物との物物交換はない。あるとすれば市場ではなく、蛸部屋か奴隷部屋であろう。棲み分けられている諸市場は、それぞれの価値基準に則って同質の価格体系をもつ。それらの市場を統合するのは価値体现物としての貨幣である。貨幣こそ資本主義社会の絶対者である。強固な壁に阻まれた棲み分け市場を自由平等社会に変える黄金色をした神秘である。『ヴェニスの商人』は、経済的棲み分け社会においては貨幣が絶対物であり、それがアインシュタインの特殊相対性世界における光と同じ役割を担っている事実に岩井氏は気づいていない。

『ヴェニスの商人』はつぎの事実にも留意していない。労働力商品市場、生活手段商品市場、生産手段商品市場という三つの棲み分け社会は財・サービスの不完全市場などというワルラス体系の土俵上にあるのではない。これらの諸市場は私的企業で消耗された労働力および労働諸手段をリフレッシュし再調達する場である。だから失業していて生産の場で労働力を消耗しなかった人間は、マネーを手にすることができず自分を自分で再生することができない。同じような事業に失敗し自分の商品を貨幣に転換できなかった人間はその生産設備も原材料も再生する能力を失う。

2. 『ヴェニスの商人』とジグソーパズル 幻覚

生産諸要素は社会の生命装置を維持する諸器官、たとえば呼吸、消化・排泄、循環という諸器官にたとえることができるかもしれない。この基本生命装置のうえに、社会システムを管

理・運営する立法，行政，法曹という政治機能，科学，研究，教育に携わる知的器官が発達し，経済社会で生みだされたエネルギーがそれをささえている。

自然力，科学力の積極的利用と結びついた資本主義的生産様式が社会的生産力を発達させてくると，生命維持を司る諸器官の比重は相対的に小さくなる。エネルギーの相当な部分が，政治・行政・法律，科学・教育，文化，スポーツ，情操という社会の上部組織に振り向けられるようになる。

こんにち社会は，ただ生きるための経済生命体から人間的な精神生命体へと変質しつつあり，その方向を模索している。エネルギーの多くがこれら上部構造的組織へ流れ，したがって，モノを生産する直接的労働過程そのものに釘づけされる人間の数も相対として減少している。相対的に余剰となった労働はまだ流通・サービスに多く張りつけられていっているとはいえ，社会的生産力の発展につれて物生産の場そのものから人間は相対的に解放されつつある。

この社会的生命体の基礎構造である経済的生命維持器官が，ワルラス氏にも，シュムペーター氏にも，また『ヴェニス商人』にも個別商品相互の価値の関係の『集合体』にみえる。商品価格の寄せ集めの体系にみえる。端的にいえば「個々の経済主体のもとにある財の一定の数量関係の体系」に映る。『ヴェニス商人』には棲み分け組織も見えたが，それは商品という死んだ細胞の塊にすぎなかった。

私的所有ハ国家デアルという哲理をもつ歴史社会では，みんなの目には，躍動する社会的生命体が価値の山，価値の集合体すなわち商品単位で構成された黄金のジグソーパズルと映ってしまう。なぜか。絶対神貨幣が放つ金色のレー

ザー光が見るひとの視覚を狂わせ，幻想の世界へ引き込むからである。

私たちが実存する経済の体系とワルラス体系との間に横たわる断層は，経済社会システムを人間や猿のような有機的生命体と認識するか，効用をもつ財商品，労働力商品，金融商品など個別の価値物の集合，すなわち自立性をもつ黄金の細胞から成り立っているジグソーパズルの世界とみるかであろう。そのジグソーパズルの世界は財・サービスの一定の数量関係を中心とした量の世界である。

生産の社会的全体構造を注視しないで富の分配だけに目を奪われてしまうと，人間社会の物質代謝を支える生産の社会的組織は見えなくなる。みえてくるのは，ただ私的所有ばかりである。個々の生産要素——生活手段も労働力をふたたび回復させるという意味の限りでは生産要素といいいいが——が私的に専有されて個別な価値物としてお互い同志で観念的に対応しあっているという事実だけが目につく。実際にはそれらは一つひとつ価格形態をとっていて，価値物としては自立して存在しているのであるが。

もつとも，たとえばシュムペーター氏が生産諸力の古い結合や新しい結合を問題とするとき，社会経済が生きた細胞，すなわち経営，企業，銀行，家計等で構成され，それぞれの細胞がその機能に合わせて組織や群を形成していると理解されている。

しかし，いったんワルラス氏の限界効用の絶対座標系に乗っかってしまうと，労働力商品が金融商品と野合して直接価値関係を結んだり，労働力商品が一万個集結して生産プラントと直接交換されるというありそうもない想定を許すことになる。貨幣なしにそんな取引は起こりも

しないし、労働力をマネーに換えてもそのマネーは生活財の購入に当てられるのがせいぜいということであろう。

こんにちよく個人貯蓄と騒がれるが、勤労者の貯蓄は住宅ローンの返済とか、老後の生活財を買うためとか、労働力市場の将来の住民になる息子や娘の個人消費資金や学資を貯めるためのもの、そういう類のものが大半である。資本家や金利生活者のように直接投資をして利殖するためではない。貯蓄という同じ専門用語も棲み分けられた領域でまったく意味内容が違ってくる。どちらの貯蓄も現在の購買力を将来の購買力に転換しているわけであるから、その限りで同じ効用をもつとっていい。しかし労働者の貯蓄は将来は生産プラントの購入には当てられず、生活手段市場に入り込むであろう。

こういう意見があるかもしれない。労働者、サラリーマンの年金資金がどこかの企業の設備拡大の資金として運用されている。だから金融市場、生産手段市場に参加しているではないか、という反論である。一見、ごもっともと賛意を表明したくなるが、やはり見当違いといわざるをえない。その貯蓄分は確かに銀行のカウンターにはいくだろう。といっても、銀行のカウンターは、夜間金庫とおなじように、金融市場の外壁である。それ以上はオフリミッツ、立ち入り禁止である。

II 価値は二重の「関係」概念である

1. 『ヴェニス商人』と価値体系

岩井克人氏の『剰余価値＝商業利潤』論を掘り下げていくと、氏の「価値体系」が基本的に

ワルラス氏のものだということがわかる。

氏はいう。マルクス氏の絶対的剰余価値概念は商業利潤を生み出す仕組みと論理上おなじである。空間的に異なる二つの価値体系の差異をつうじて剰余価値が生まれる。生産手段の所有者として、「生産過程における、労働力、原材料および生産手段とそれらの結合によって生産される必需品および生産手段との間の交換比率」という資本にとって聖域である価値体系と「市場における労働力と必需品との交換比率」という労働と資本とが共存する価値体系との両者に同時に接触できる産業資本は、それらの間に存在する価値上の差異を利潤という形で搾取している。

また、氏はいう。技術革新によって特別剰余価値を求めようとする企業活動は、「商業利潤（絶対的剰余価値）」にあぐらをかく経営者を損失の危険にさらす。新しい利潤は現存の価値体系と将来の価値体系との差異からひきだされる。技術革新の勝者だけが新しい利潤を汲みだすことができ、劣者は損失だけでなく、淘汰の危険にさらされる。たえまない競争のプロセスのなかで、「商業利潤（絶対的剰余価値）」をうみだす二つの空間的価値体系の差異は消滅する。

岩井氏は、一方で、生産要素市場のあいだに異なる価値体系があると意識している。だが、その価値体系が異なる価値基準をもつ異質は慣性系だとは自覚されていない。たんに競争が制限された不完全競争市場であり、両者のあいだには量的差異が発生するにすぎない。

それゆえ、企業相互の競争をつうじて、二つの市場のあいだにある価値の量的差異はなくなり、空間的にはワルラス体系が形成される。

動態経済としての資本主義は、労働の搾取ではなく、生産諸条件の新しい結合の実践、すな

わち生産・経営の技術革新によって、企業自身の力で利潤をうみだす。このかぎりでは氏の見解は、シュムペーター氏の動態均衡論を確認しているにすぎない。しかし、氏の主張はそれにとどまっているのではない。

シュムペーター氏の動態均衡体系はワルサス氏の静態均衡体系の論理的発展である、と常識はおもっている。岩井克人氏は、シュムペーター氏の動態均衡論がマルクス氏の搾取論をベースとし、それをワルサス体系に発展的に解消させた理論として位置づけた。

ここに岩井克人氏の問題提起の意外性と斬新性がある。

2. 異質な価値概念—商品価値と生産諸要素の価値

資本制商品生産社会では生産諸要素は私的に専有されている。それゆえ、生産活動をおこなう企業すなわち生産資本は、生産手段、労働、土地を対価を支払って調達しなければならない。またそれらを調達するために第三者から貨幣を工面してこななければならない。

企業は社会が必要とする生産手段および生活資料を生産し、それを自分たちの私的な専有物とみなす。それは、ほかの生産条件すなわち土地や労働の提供者に地代や労賃として対価を支払い、またそれらを調達するための貨幣提供者に利子として対価を支払うからである。

いいかえると、企業が、一つの社会的グループとして、独占的に専有していると考えられている社会の総生産物は、それらを生産する際に生産条件およびその調達手段（貨幣）を提供した諸グループに配分される約束ができていたわけだ。

個別企業は同じグループの内部で取得した生

産手段とひきかえに貨幣をひき渡したが、この貨幣をもちいて生産手段は企業相互のあいだで分配される。生活資料は労賃、利潤、利子、地代という形態で手にいれた貨幣を媒介に生産諸要素の専有グループ間で分配される。

生産諸要素を私的に専有している賃労働、企業、貸付資本、地主という諸グループは、企業が生産し専有している価値物すなわち商品形態にある生活資料を、生産諸要素の価値すなわち労賃、利潤、利子、地代という形態で手にいれた貨幣で分配しあう。

生産手段は企業相互のあいだでその価値において分配される。

ここには一つの検討すべき課題があらわれている。生産諸要素の価値と商品の価値とがどのような区別をもち、相関性をもっているかということである。

生産物を分配する手段である貨幣は生産諸要素の価値すなわち労賃、利潤、利子、地代にもとづいて社会の各層に分配される。これら生産諸要素の価値は、すでに指摘しておいたように、市場ごとに価値基準をもっている。つまり、労賃、利潤、利子、地代は生産要素市場の特殊な価値基準によってきまる。

一方、商品の価値は生産手段を私的に専有している企業相互の生産関係、商品相互の価値関係によって定まる。商品総量の価値の貨幣総量が対応し、貨幣所有者の手に商品すなわち生活資料と生産手段が分配される。

生産諸要素の価値と商品の価値とは、あきらかに価値基準を異にしている。価値を決定する市場にもおおきな違いが認められる。

すでに前稿「技術革新と『投下労働価値説』」で、商品の交換法則を解明するために二つの命題が存在することを指摘しておいた。

商品交換法則解明のための第一命題

すべての商品はそれを生産した人間(企業)の手に私的に専有され、そのような生産者の内部で商品が価値物として交換されている。商品交換法則を解明するために第二命題

商品形態にある社会の諸生産物は、貨幣の配分をとうしてそれらの商品の生産に直接間接に参加する賃労働、貸付資本、土地所有および生産資本(ここでは商業資本をふくむ)に分配される。

第一の命題は、商品と商品との関係の背後に生産者(生産諸条件を包摂している企業)相互の関係がひかえていることを察知させる。

第二の命題では二つの異質な価値関係が問題とされている。ひとつは、生産諸要素が商品生産者である企業の手で結合される際にあらわれる各要素の価値関係である。いまひとつは、それら生産諸要素の価値が実現された形態である貨幣と財商品の価値との関係である。生産諸要素はまず貨幣形態で自己の価値すなわち労賃、利潤、利子、地代を表現する。つぎに実現された貨幣で自分が必要とする生産物を購入する。

ここでは貨幣は、価値尺度として二重にその役割を果たしている。生産諸要素の価値尺度と財商品の価値尺度。

視角をかえて問題をみれば、第一命題は、商品と商品という姿であらわれる価値関係の背後にある商品生産の社会的関係を探る作業、すなわち商品の価値とはなにかを解明する作業である。ひらたく商品価値の概念規定をする仕事といってもいい。

第二命題は、労賃、利潤、利子、地代という生産諸要素の価値の背後に何があるか、すなわち所得概念を探究する作業である。社会各層の所得は生産物を購入する手段である貨幣からな

る。社会の所得が生産諸要素の価値という姿をとるという意味のかぎりでは、広義の価値概念である。

リカード氏は、所得概念が価値概念としてあらわれると発想できなかったために「価値を生む自然」に困惑した。一方、ワルサス氏は生産諸要素の価値が商品の価値とは異なる所得概念であることに気づかず、両者をひとつの社会的価値体系として統合した。くりかえしになるが、これを可能にしたのは、貨幣が生産諸要素の価値(所得)を尺度するばかりか、財商品の価値尺度でもあるという貨幣の機能に負っている。彼は貨幣をヴェールにすることによってこれら異質の価値関係を同質的なものにみせかけている。

3. 価値を生まない労働と価値概念

そこでまず第一命題をふまえて、商品の価値概念を分析しよう。

ここでは、賃労働、企業(生産資本)、貸付資本、土地所有という棲み分け社会、したがって生産された社会の富が諸階層にどのように分配されるかという所得概念とかかわる問題は、考えのそとにある。生産諸要素は、企業(生産資本)をリーダーに商品生産に集中し、分配上の争いは忘れている。

この「単純商品生産社会」という抽象世界を論理的に想定することは、非現実的でも現実無視でもない。ここでは私的に専有されている生産諸要素が企業(生産資本)のもとに結合され、生産された財が企業の私的専有物となるという与件が設けられているだけである。生産諸条件がどのように結合され、それが生産物の社会的配分とどう関係するかという特殊歴史的生産の

関係および分配の関係は、分析を事後に残している。

実際、私的に専有されているとはいえ、いったん生産諸条件が企業に買いとられると、それらは企業の絶対指揮下にはいる。また企業の業績が生産諸条件を提供する側の利害に影響するので、商品生産のプロセスでは生産諸条件の所有者間に「運命共同体」意識が発生する。雇用契約、労働協約のもとで賃労働は労働を強要されるだけでなく、企業ファミリーの一員として忠誠心をもつ。終身雇用制はそれを助長する。金融機関は、よくない経営だけでなく将来性をもつ企業の経営に積極的に参加しようとする。付加価値の分配問題では骨肉の争いまで演ずる生産諸条件の私的専有者は個別企業の直接的生産過程では一体化された「経済人」とみなされる。

そこで論理上「単純商品生産社会」を設定して、商品交換の背後にある「なにか」を追求しよう。

小麦だけを生産している農業経営者が、それを手もとに持っているかぎり小麦は価値をもたない。労働そのものが価値ではなく、労働をして効用（使用上の価値）ある物をつくりだしても、価値をもつとはいえない。

小麦は交換をつうじて自分が価値ある物と確認できるにすぎない。自分にとって効用（使用上の価値）ではない物が、他人にとって効用（使用上の価値）をもつからである。

ではなぜ小麦が農業経営者にとって不効用で、他人たとえば綿布生産者にとって効用（使用上の価値）物となるのか。社会的分業のもとで小麦と綿布が生産されているからである。したがって、もし小麦と綿布とが交換されるとすれば、小麦を不効用と感ずる農業経営者は綿布に

効用を感じ、綿布に効用を覚えない綿布生産者は小麦を効用（使用上の価値）物とみなしているわけだ。

だが、社会的分業がそのものとして存在するだけならば、生産物は商品として交換されないし、したがって価値も問題にならない。みんながつくったものを持ち寄り、その富の山からすきなだけもっていくという経済システムをつくることもできる。

社会的分業のもとでつくられた生産物がその生産者のもとに私的に専有されていること、——これが生産物を商品にして交換価値をもたせ、商品相互の価値関係を発生させる源である。

したがって、物と物、商品と商品との関係としてあらわれる交換価値の背後には、社会の富（効用物）の生産が生産諸条件（諸要素）の私的専有のもとで社会的分業の体系を土台におこなわれているという経済社会システムがある。生産者が専有している生産物が他人の必要物であり、お互いのあいだで私的専有物を交換しあってはじめて生産諸条件を提供するひとびとが生活を続けていけるという経済システムがある。

価値は商品に備わる物性ではない。商品と商品との社会的関係の表現形態である。商品の価値関係は、生産諸条件を私的に専有している企業の生産活動が社会的分業の体系の一環にすぎないという社会経済システムにおける特殊な生産の関係を映している。

【商品の価値概念】

商品の交換価値は、生産手段の私的専有のもとでおこなわれる財の社会的生産というある歴史社会の生産関係、生産手段と労働の社会的配分関係を映している。労働そのものは価値を生まず、価値と直接関わり

をもつ概念ではない。

【商品価値の第一法則】

ある経済社会で成立している商品相互の価値関係は、その社会が必要とする財を生産するのに要する労働の社会的必要量の関係をあらわす。その際、生産手段を生産するのに社会的に必要とされる労働量もふくまれる。

個々の効用物を生産するのに必要な生産諸条件が私的に専有されながら社会的分業体制のもとで社会が要求する富を生産する経済システムのもとでは、生産手段と結びついた労働が社会的に適性に配分されているかどうかは、生産された効用物相互の数量関係によって確認できるにすぎない。だから、ミカンがある需要水準をこえて生産されれば、いままで1トンのミカンが5着の上着と交換されていたのに、4着の上着としか交換されなくなる。もし5着の上着と交換したいとおもえば、ある量のミカンを焼き捨て、さらにミカンの木を切り倒さなければならない。社会全体の富を生産するために必要な生産諸条件（生産手段と結びついた労働）の社会的配分関係は、商品の交換価値をつうじて調整される。

商品相互価値関係すなわち商品の交換価値は、特定の財を生産する生産手段と労働が社会的にうまく配分されているかどうかを点検する社会的労働の配分探知器である。商品のなかに「価値」属性が隠されているわけでも、労働が価値を生むわけでもない。商品の価値な「関係」概念であり、実体のある「なにか」ではない。労働は価値を生まない。

もちろん、価値関係の背後に生産諸手段と有機的に結合した労働の社会的配分関係があるという意味では、価値現象の背後に労働の社会的

配分関係という本質的内容があるといってもかまわない。ただ、労働と商品との関係、労働力と交換価値との関係は、それ以上のものではないということだ。

「社会的必要労働が支出されて価値を生む」というひとがいれば、彼はトートロジーの世界にいる。これは「社会の必要におうじて分配されている労働が労働の社会的配分関係を生む」というに等しい。

商品の価値が社会の富を生産するのに必要な労働（および生産手段）相互の配分関係を表現しているとすれば、労働と結合している生産諸手段に技術的改良が加えられるプロセスで労働の社会的配分関係が変わる。したがって商品相互の価値関係も変わる。

【商品価値の第二法則】

ある生産部門で科学力、自然力を利用する労働の社会的生産力が向上し、その生産物にたいする社会の需要に変化がないとすれば、労働の社会的配分関係を表現するその商品の価値は他の生産物のよりすくない量であらわされる。つまり、その商品の生産に必要な労働時間は相対的に減少する。なんらかの事情で（現実には競争の作用で）労働の社会的生産力が社会的規模で発展すれば、そして社会の富の需要量に変化がないとすれば、その経済社会が必要とする総労働量（労働時間）は減少する。そのぶん余暇の時間——失業という姿をとるかもしれないが——が増える。この場合、社会的必要労働量の減少は社会の総商品の価値量の減少となって水面上にその姿をあらわす。

だが、現実には貨幣すなわち金量であらわされる商品の価値は、社会的な生産力の発展があっても減少しない。

社会的生産力を発展させた豊かな国ほど同じ労働支出量（時間）で生産される使用価値（富）の量も貨幣で表現される価値の量も多い。

これこそ、頑固な『投下労働価値』論者であるリカード氏を悩ませた問題のひとつである。

Ⅲ 棲み分け社会と利潤創出 ——岩井克人氏の『剰余価値＝商業利潤』論 は正しいか——

1. 富の社会的配分と貨幣

自称マルクス経済学通，M 氏との会話。

私： なるほど。価値は生産されるものでなく，生産諸手段の私的所有のもとで形成されている労働の社会的体系が商品の価値の関係として現象するということですね。

M： そうです。このような価値関係を理解すると，価値の世界は生命体の世界になります。つまり，商品の交換は単一商品しかつからないそれぞれの生産部門に生産活動をささえる諸生産物を配給するプロセスです。つまり，生命の源である細胞組織，すなわち各生産的企業に栄養分を送る循環組織の役割を商品の交換したがつて商品流通は担っているのです。

ところで，ご存知のように，ある商品の交換価値は別の商品の数量であらわされます。たとえば一トンのミカン＝5着の上着という価値関係は2つの異なる認識をうえつけます。ひとつは，一トンのミカンをつくる50労働日は5着の上着をつくる50労働日に等しい，という社会的労働の配分関係です。

いまひとつは，ミカンの価値が上着の価値であらわされているという，価値の表現様式の特异性です。この場合，上着はミカンの価

値をあらわす等価物になっており，このような等価物の完成した姿が貨幣です。

貨幣は社会の細胞組織である個々の企業で生産した富を必要におうじて分配する血流組織です。いいかえますと，価値体系の背後には，生産手段の私有制に基盤をおいた社会的生産組織とそこでつくられた物を各企業に分配する生産物の社会的配給組織とがあるのです。

したがって，貨幣は，諸商品の価値をはかる価値尺度としては社会全体の労働および生産手段の配分の状態を点検する手段です。他方，貨幣は流通手段として生産されている社会の総生産物を配給する媒体です。

2. 棲み分け社会と富の分配

M： ここで前に保留していた問題が頭をもたげてきます。企業すなわち生産資本の手に統合されている生産諸条件は，「単純商品生産社会」という想定のもとで企業すなわち生産資本の私有物とみなされました。現実には労働者や生産諸手段という生産諸手段はもともと私有されていて企業の所有物ではなかったわけです。

生産資本である企業は貸付資本から貨幣を借りて生産手段を購入するばかりか，労働者に賃金を，地主に地代を支払って生産諸条件を私物とします。そのあとで商品を生産し，商品を販売することによって事前に投入した資金を回収し，支払金利をふくむ利潤を手に入れるわけです。

つぎの生産を継続しておこなうためには，生産資本は生産設備の減価償却分および原材料・燃料の購入費を内部に留保し，残りを資

金借入を続けるための利子、地代および労賃の支払にあて、利潤として自身の取り分を手にします。

もし土地をふくむ生産諸手段が私的に所有されておらずに社会的に共有され、経済計算で生産諸手段ならびに生活諸手段が社会的に分配されるとすれば、労賃、利潤、利子、地代という貨幣的国民所得概念も生産手段の価値および付加価値という価値概念も必要ではないようにおもいます。つまり、生産諸手段と生活諸手段は社会全体のものとなり、それらをどう社会的に生産し分配するかという社会的会計計算だけが問題になるでしょう。

生産手段、前貸できる蓄蔵貨幣、労働力、土地が私的に専有されている棲み分け社会ではそうはいきません。社会が生みだした生産物の分配に先行して貨幣が生産諸要素の私的専有者のあいだに分配され、その貨幣の分捕り量におうじてどれだけ社会の富、社会の生産物をわたくしのものとして専有できるか、その量が決められるのです。

そのアンチテーゼとして僕はこういいたいのです。

生産諸手段が私的に専有されないで社会全体で管理され、生身のすがたで生産手段と生活手段の生産と分配が計算される社会では、労賃、利潤、利子、地代さらには租税という貨幣的所得分配は姿を消すでしょう。それに代わって、生産・流通労働、生産・経営・流通管理労働、社会的会計計算および管理労働、土地造成・管理労働という有機的経済システムをささえている労働、政治・法曹、研究開発・教育、芸術・文化にたずさわる労働、すなわち社会システムを支えるのに必要な労働に社会会計計算をつうじて生産された富が分

配されると思うのです。ここでは商品という黄金色の細胞からできているジグソーパズルの世界は消えています。

3. 「関係」概念としての利潤

M：ところで、くだんの『ヴェニスの人』、岩井克人氏の剰余価値の源泉は商業利潤だという見解にたちいてみたいのですが。十分でないとはいえ、彼が不完全競争的な棲み分け社会の存在から利潤の発生を説いたことは正当に評価されるべきです。

剰余価値とか利潤とかは価値同様それじたいで実体をもっているわけではありません。それらは「関係」概念にすぎません。僕は、技術革新が利潤を生むというシュムペーター氏とは違う考えをもっています。社会の富の一部が生産手段の私的専有をつうじて不当に配分されている、つまりかならずしも社会経済システムを支えてもいないのに私的利害で生産に関与している一群に不相応に配分されていると主張したいのです。そういう富の社会的配分の特殊な状態——、特殊歴史的な性格をもった富の配分の関係を、利潤とか剰余価値という経済タームのうちにみているのです。

社会経済システムをささえている人びとの活力を再生産するのに必要な財が十分に供給されず、生産手段だけが大量に蓄積されて遊休状態にあるとか、無駄な浪費をする社会のために自分たちに必要な財・サービスの生産をはるかにこえて働かされる働き蜂症候群が発生しているという状況を、僕は剰余労働、したがって剰余価値の提供といたいわけですね。

こんな事態が一般的に生ずるのは、土地や生産手段や金融資産を私的に専有する人びとが棲み分け社会のメカニズムをつうじて相当無計画に貨幣を分捕り合戦しているからではないのか、さらにはかれらが社会経済システムを私的に牛耳っているからではないのか、と僕はそう考えているのです。これはワルラス体系よりむしろケインズの不均衡経済世界に近い見方であって、それを裏側からみた見解といえるかもしれません。

私： あなたがなぜ岩井氏の『ヴェニスの人々の資本論』に関心をもたれたか、察しがつきました。

ところであなたの社会経済システムが生産を軸としたものだということはわかりました

が、それはまだ動態的な競争社会、巨大な社会的生産力体系として展開されていませんね。わたしはそういうダイナミズムをもつ社会こそ生きた社会と考えています。シュムペーター氏はまさにその作業をしようとしたのでありませんか。

また社会的生産力の発展は価値量を相対的に減少させるはずなのに、生産力水準がはるかに高い先進国がより少ない労働でより多くの価値生産をするという「投下労働価値説のパラドクス」は未解決のままですね。

M： ご指摘のとおりです。それらの問題は次稿「ワルラスと価値概念」にまつことにしましょうか。

(未完)